

めでいかすとる Médicastre



「おいやさまつり」

鶴岡地区医師会勉強会抄録

日時：平成29年9月1日(金) 19:00~20:30
場所：鶴岡地区医師会館 3階講堂

『今、眼科ではここまでできる！ ～最新の白内障手術からiPS細胞移植まで～』

講師：東邦大学医療センター 大森病院 眼科
診療部長・教授 堀 裕一 先生

眼科診療はこの20年間で大きく進歩しています。白内障手術は小切開・無縫合になり、最近ではフェムトセカンドレーザーを用いた手術ができるようになりました。加齢黄斑変性に対するiPS細胞を用いた世界初の細胞移植手術が報告されたのもご存知のとおりだと思います。

また、眼科では網膜血管を観察することで、糖尿病や高血圧患者の全身疾患の診察に関与してきました。これまで網膜症の分類は定性的なものでしたが、最近ではレーザースペックルフローグラフィ（LSFG）という検査で網膜血流を定量できるようになり、網膜の血流値が心疾患や慢性腎臓病、動脈硬化などと相関している事が明らかになってきました。我々眼科医が全身疾患に対して他科の先生方に対して、より詳細な情報を提供できる時代がきたと考えております。

今回の講演では、内科をはじめ眼科以外の科の先生方に対して、最新の眼科診療についての話題をご紹介します。また皆様の日常診療において我々眼科医がどのような形でご協力できるかを先生方と一緒に考えていければと思います。忌憚のないご意見をお寄せいただけましたら幸いです。

准看護学院体育大会

日時：平成29年9月22日(金) 9:00～
場所：小真木原総合体育館

前日までの曇り空から一転、快晴の中、1・2年親善体育大会が小真木原総合体育館で行われました。2年生の体育委員を中心に企画・運営を行い、当日は学生全員で準備・後片付けを協力して行うことでスムーズに進行することができました。体調不良で欠席した学生がおり全員参加ではありませんでしたが、借り人競争やバレーボールでは教員も参加し大いに盛り上がりました。学年を超えて絆が深まった一日となりました。



体育大会実行委員長（2年）前田 美由紀

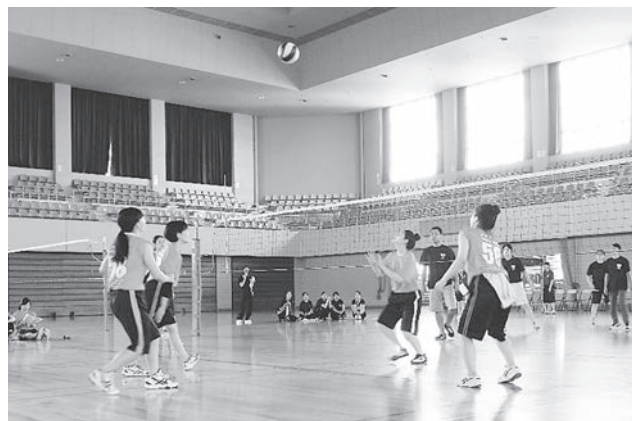
実行委員長として臨んだ体育大会の中で、何よりも大変だったのは1年生との連携でした。実習期間に入ると連携が不足し1年生にも迷惑をかけてしまいました。話し合いを何度も行い迎えた当日は、体育委員以外の皆の協力もあり、スムーズに進めることができました。中でもバレーボールは、どの試合も接戦で、やっても楽しかったし、見ていてもとても楽しかったです。途中さまざまなハプニングもありましたが、無事に終わることができて良かったです。今回の体育大会を通して、学年の絆も深まったし、1・2年生の絆も深まったと思います。委員長を辞めたいと思うことは何度もありましたが、今はやって良かったと思っています。

体育委員（2年）兼子 まどか

体育委員の私たちは、昨年の体育大会の反省点を出し合い、より良くするためにどうしたら良いか、ルールの見直しや新たな競技の立案を昨年から行いました。夏休み前の合同体育での結果を踏まえ、更に計画を練り直しました。話し合いを重ねるなかで、一人で抱え込むのではなく皆の意見を聞き、全員で取り組むことの大切さに気付くことができました。体育大会で学んだことをこれからの実習に活かしていきたいです。

体育委員（1年）板垣 岳人

大会当日は大会目的を達成し、学年を超えた絆を深め大きなトラブルもなく終了できました。実習等で忙しい中で1年生の体育委員を指導しながら、道具作りやプログラム作りをしていただき2年生にはとても感謝しています。体育大会を終えて見えたもの、分かった事、反省点もありました。それらを踏まえ改善し、今年の大会よりも来年の大会が素晴らしいものにできるように1年生は力を合わせて取り組みたいと思います。



鶴岡地区医療学術懇話会

日時：平成29年9月21日(木) 19:00～
場所：東京第一ホテル鶴岡

『DOAC 4 剤時代の心房細動に対する抗凝固療法』

講師：秋田県立脳血管研究センター 循環器内科診療部
部長 阿部 芳久 先生

脳梗塞の原因の中で、心原性脳塞栓症はアテローム性血栓性脳梗塞やラクナ梗塞と比較して重症例が多いことが示されている。従って心原性脳塞栓の原因として最も多い心房細動に対する抗凝固療法は、重症脳梗塞を予防する手段として重要視されている。本講演では、当センターに救急搬送された症例を通して心原性脳塞栓症の一次予防、特にDOAC (Direct Oral Anti-Coagulant) 治療について考えてみたい。

平成27年度に救急車で搬送された脳卒中患者は247例で、脳出血は97例 (平均年齢70歳)、脳梗塞は150例 (平均年齢76歳) であった。

脳梗塞例のうち心房細動を原因とした心原性脳塞栓症は49例 (33%) であった。心房細動の診断時期は発症前が33例で、発症時または発症後が16例であった。死亡を含めて退院時に介助なしで歩行不可以上の予後不良例の割合は、前者が42%であったのに対して後者は73%であり、脳塞栓症発症前に心房細動を診断することの重要性が示された。このためには一過性の動悸を訴える患者を放置しない、診察時や血圧測定時に脈拍に注意する必要がある。発症前に心房細動と診断されていた例のうち、有効な抗凝固療法が行われていなかった例は55%であった。これらを減らすためには、心不全、高血圧、肥大型心筋症、65歳以上、糖尿病、脳梗塞やTIAの既往のいずれかに該当する症例にはDOACを使用することが推奨される。ワルファリン使用中に脳梗塞が発症した症例は10例で、多くは発症時のPT-INRが治療域以

下であった。これらを予防するためには、PT-INRの頻回測定またはDOACへの切り替えが考えられる。また、DOAC使用中に脳梗塞になった例が5例あり、減量基準を順守して使用すること、勝手な休薬や飲み忘れを防ぐことが必要である。

脳出血例のうち心房細動例は16例で、15例に抗血栓療法が行われていた。ワルファリンを服用していた11例では、脳出血時のPT-INRが高い例はほとんどいなかった。また4例ではDOAC服用中の脳出血であった。このことから抗血栓療法中の脳出血予防は薬剤に頼るだけではなく、降圧目標を130/80mmHgに設定して厳重な降圧を行うこと、禁煙指導、不必要な抗血小板薬併用をしないことに気を配るべきである。

現在DOACとして、抗トロンビン薬のダビガトラン (プラザキサ)、抗Xa薬のリバーロキサバン (イグザレルト) とアピキサバン (エリキュース)、エドキサバン (リクシアナ) が使用可能である。DOACそれぞれに大規模臨床試験が行われているが、登録症例の重症度や対照となるワルファリンのコントロール状況の違いなどから、DOAC間の優越について直接比較することは困難である。

いずれのDOACであっても、禁忌症例には使用しないこと、腎機能としてCcrを計算して使用すること、休薬や飲み忘れを防ぐことが、心原性塞栓症と副作用としての出血を防ぐために重要である。

YBCラジオ「ドクターアドバイスで きょうも元気」ラジオ出演体験記

・メイキングオブYBCラジオ

県立こころの医療センター 須貝 孝一

この7月、山形の某ケーブルテレビの収録で2回、YBCラジオ「ドクターアドバイスで今日も元気」の収録で1回、山形まで3往復することとなり、日ごろ地味に生きている私には珍しくメディア露出の多い日々となりました。東北2つめの医療観察法病棟のトップをやっていることもあり、先生のご専門は？という質問には司法精神医学です、と答えるようになって、どちらの番組でも医療観察法の話をしてきたのですが…。「ドク



メディアタワー内のYBCラジオスタジオにて

ターから病気のことを教えてもらって、私たちが健康な生活を実現しよう！」というラジオ番組と医療観察の話ってそぐわない？と悩んだのですが、医療観察は多職種で連携して患者さんの社会復帰を推進するノウハウを、一般の精神医療にも還元して精神医療の底上げを目指そうというのが法律の目的。精神科治療には多職種チームの連携が重要であること、治療の究極の目標は患者さんの社会復帰、ノーマライゼーションの実現であること、地域で精神障がい者の方と接したときの留意点…など精神科の普遍的な話にして何とかラジオ向きの話になったかな…。

ラジオ収録は一回分ずつで、一回終わるたび打ち合わせをしてすぐ収録になるのが、山内アナも特に確認もなく私のアイデアを消化してちゃんと自分の言い回しにして質問を出してくれる…。ディレクターとアナウンサー、医師の3名のみでの収録ですが、みなさんの即応力さすがはプロ…と感心させられる連続でした。

ちなみに…。先生、ここで私を見つめている方はいったい誰ですか？という山内アナの質問に続いて私が密かにスタジオに持ち込んでいたフィギュアが紹介され、後半はほぼ毎回、カルトな話に終始…。ラジオでフィギュアの話をしても見られないだろ！と突っ込みたくなるまさかの展開。



ゲストに付き合っってフィギュアを持たされる山内アナ。アナウンサーも大変です。

後半のフリートークがマニア道、カルト談義ばかりになってしまってディレクターさんも私からもう少し格調高い話を引き出そうと必死だったのですが、キャラクター的に無理そうだと結局あきらめられてしまいました(笑)。

唯一ストレス解消法として、私インドア派ですがドライブは結構好きで、病院長から次々仕事を丸投げされるストレス(笑2)解消にドライブは結構いいかもなんて話が採用されて最終日はその話になった。で、沖縄だったら北端の辺戸岬、四国の足摺、室戸岬、東尋

旅行記 旅の思い出

鶴岡協立病院 今井 玄樹

2011年2月末、国家試験の日程を終えた私は、モスクワへ短期の語学留学に出発しました。ロシア語についてはキリル文字や挨拶など、必要最低限の知識しかない状態での、無謀とも言える留学でした。深夜に空港に到着し、ベンチで一夜を明かし、翌朝電車で郊外にある寮に到着しました。寮には、ヨーロッパ各国から大勢の留学生が集まっていた。翌日から初学者のクラスに参加しました。1クラス10人弱で午前中のみ英語で授業が行われ、午後は復習をしたり、モスクワ市内を観光したりしました。モスクワの地下鉄の路線は市中心部の大概の場所を網羅しており便利でした。案内板はほぼキリル文字というのが難点でしたが、次第に慣れました。テレビでよく見るヨーロッパに似た街並みが広がり、歩道には石畳が多く使われていました。「赤の広場」は観光客でにぎわっ

ており、隣接するクレムリン前では衛兵交代式に人だかりができ、建物内部の見学ツアーの順番を待つ長い列ができていました。春先のモスクワはまだまだ寒く道は凍っていましたが、積雪はほとんどありませんでした。車道は舗装されていましたが雪解けの泥でひどく汚れており、自動車は汚れが激しく、すべて灰色に見えました。また、交通マナーが悪く、クラクションの音があちこちで聞こえ、1時間ほど散歩をすると2、3件の言い争いを目にしました。こうして1カ月弱にわたる生活はあっという間に過ぎ去りました。肝心の語学の面では大した進歩はなく、現在に至っては挨拶はおろか、キリル文字のアルファベットすら怪しいというありさまです。しかし、初めての海外での長期滞在の記憶は鮮明に残っており、良い思い出です。

表紙

「おいやさまつり」

真島 吉也

例年8月お盆の一夜、山王町の大通りは、江戸時代よりつたわる“庄内はえや節”に合わせて踊る人たちと観客で賑わいます。普段は誠に静かな商店街がものすごい熱気に包まれる、その変貌ぶりにいつも感動を覚えています。

編集後記

夏には降圧剤を中止、減量した方々の血圧が再び上昇して来ております。林檎、柿、梨、葡萄、杏子、サクランボ、無花果等々果物が豊富な当地域の患者さんは中性脂肪値等も上昇して来ており、日々の往診では刈り取られた田んぼが朝日村の山の方に広がっていく景色を見て秋の訪れを感じます。過ぎしやすい季節だと思うのは僅かな時間で、ふと気づくとあたり一面が真っ白になるというような事を患者さんと話しながら日々の診察をしております。

須貝孝一先生のラジオ出演体験記に、趣味のフィギュアの話が出ておりました。最近が多忙で色鉛筆で絵を描く余裕はなく、お気に入りの作家の版画や蔵書票を収集するだけでした。TVのCMでデアゴスティーニのドールハウス ムーミンハウスが紹介されていました。私は白黒TVでムーミンや鉄腕アトム等を見て育った世代です。現在、寝室の机にはムーミントロール、スナフキン、ミイ、ムーミンパパがいます。寝る前に少しずつ作成中ですが、100号まで続ける自信はありません。万が一、完成できた時にはマイ・ホビーに紹介したいと思います。

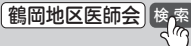
小野俊孝先生のお力で「にこ・ふる」に「母乳とおくすりハンドブック」を置いて頂ける事になりました。私は日々の診察で非常に重宝しています。当番の際には、是非手に取ってみて下さい。

(佐久間 正幸)

編集委員：三浦道治・小野俊孝・福原晶子・三科 武・佐久間正幸・木根淵智子・渡邊秀平

発行所：一般社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町1-34

TEL 0235-22-0136 FAX 0235-25-0772 E-mail ishikai@tsuruoka-med.jp

ホームページにも掲載しております  URL <http://www.tsuruoka-med.jp>